

「黒松内フットパス」 農、食、自然そして人とつながる



小川 浩一郎 (おがわ こういちろう)
 (株)ジオ (THE-O) 代表取締役

1980年札幌市生まれ。2001年エコ・ネットワーク代表代行、13年北海道科学大学客員准教授。札幌市南区常盤で育つ。『フットパス』をキーワードに市内、道内、国内で普及活動、ウォークイベントを実施し、ワールドウォーカーとして世界の「フットパス」を歩いている。「歩く」ことを通じて自然あふれる都市・札幌を観光客へ伝えるべく奮闘中。著書に「北海道フットパスガイド①」「北海道フットパスガイド②」。

特徴の異なる5つのルート

札幌と函館の間ほどにある黒松内町は渡島半島の付け根に位置し、農業や酪農だけでなく福祉、環境分野にも積極的に取り組んでいる町です。ブナ北限の里としても全国的に知られており、ブナ林付近から流れる朱太川のアユも有名です。また北海道でも最初期からフットパスに関わっている町としても広く知れ渡っています。町内に5つのフットパスが整備されており、それぞれ特徴の異なるルートになっています。

黒松内フットパスで最初に完成したのは「チョポシナイコース」で、2004年にでき、黒松内の道の駅「トワ・ヴェール・ドゥー」から黒松内町役場までの約10kmです。フットパスの醍醐味でもある田園地帯と森林や河川沿いを通るルートに設定されています。どちらを起終点にしても歩けるフットパスになっており、コースサインやコースマップもしっかりと整備されているため初心者でも楽しめるでしょう。町役場周辺の市街地を除くと田園地帯と森林となっていますが、アクセスがしやすいのも嬉しい点です。起終点のどちらも徒歩圏内にJRの駅があり駐車も可能ですし、美味しい地産の食事^{たんろう}も堪能できます。特に乳製品などの加工食品は全国的にも知名度が高いことで知られています。

足裏をモチーフにしたコースサイン

道の駅を起点とした場合の前半部は田園風景の広がる道になっています。道の駅には大きな町内のフットパス地図が置かれているので、ルートを確認するとよいでしょう。黒松内のフットパスにはいくつか特筆すべき点があります。まずはコースサインが挙げられます。足裏をモチーフにしたコースサイン^{ずいしよ}を随所で見か



足裏をモチーフにして色分けされたコースサイン





けます。緑と赤の二種類ありますが、緑は公有地、赤色は私有地を示しています。足指の方向が進行方向になっているため、道が分かれています。間違えることなく歩けるのがウォーカーにとってはありがたい配慮です。

畑を通り抜け、国道を横断します。熱郭川沿いのルートには河川名が書かれた看板にしっかりとフットパスのルートも記載されています。2点目の特筆すべき点は行政と地域のフットパス団体の関わり方です。黒松内町では行政と地域団体がしっかりと協力しながらフットパス活動を行っています。フットパスの整備や設定、利用などは「黒松内フットパスボランティア」が行っており、行政は道の所有者から通行の了解をとりつけたり、予算の確保、イベント時などの受付業務などを担っています。まさに行政が黒子役に徹し、町民が主役になる仕組みを作っているのです。僕らはこの仕組みを「黒松内方式」と呼んでいます。行政の協力体制があるので、こういった公共の看板にもフットパスが掲載されるという訳です。

土地所有者たちもフットパスに参加

熱郭川沿いの道ではアユやヤマメの生息する清流や河川沿いのオオイタドリがトンネルになっているような幻想的なルートが印象的です。河畔林を抜け、岡本橋に辿り着く辺りがチョコシナイコースの中間点となっていて、近くにある千葉牧場で休憩することもできます。3点目の特筆点は地域住民の関わりです。本場イギリスでフットパスは土地所有者が囲い込む自然、田園地帯を利用したい労働者階級の権利奪還運動として始まりました。イギリスでは土地所有者がフットパスを通るのを快く思っていない場合もあります。逆に日本では始まりから土地所



イタドリトンネルと名付けられたルート

有者たちもフットパスに参加している場合が多くあり、特に黒松内町では大きな^{あつれき}軌轢にはなっていません。千葉牧場ではフットパスウォーカー用の水飲み場やバイオトイレが設置されています。イベント開催時には牧場主の方に臨時直売所を開いてもらい、採れたて野菜を購入することもできます。農家以外でも町の住民たちがさまざまなものでおもてなしをしてくれます。

岡本橋を渡ると少しずつ緑が増えていきます。ここはかつて町道として使われていましたが、新しい道路ができたことによって使われなくなっていました。ここが4点目の特筆点です。この旧町道をフットパスにするため町民と都市部からのフットパス愛好家がササ刈りをして切り開きました。フットパスの特徴のひとつである地域間交流が完成前からフットパスを通じて行われていたのです。斜面を登っていくと天気がよければ日本海を望めるポイントもあります。登りきったスキー場からは町内を一望できます。景観条例を制定して色調を統一した屋根が広がっているのも環境の町・黒松内らしい景観です。そのまま斜面を下って道なりに進めば黒松内町役場に到着です。

「人と人」「地域と地域」が繋がるフットパス

さらに4つのフットパスが設定されていて、それら全てをつなげると約34kmのミドルパス（中距離フットパス）になります。今回は紹介しきれませんでした。それぞれおもしろい特徴や特色があります。今後はニセコ町までのロングパス構想も両町で計画されていると聞いています。フットパスイベントも年に数回行われています。人と人、地域と人、地域と地域が繋がるフットパスをまさに体現しているのが黒松内町です。今後も素晴らしい進化を遂げていくことでしょう。



千葉牧場にあるフットパスウォーカー用のバイオトイレ